

令和3年度現在、構成員86名。水稲作付面積410haのうち、372haで化学農薬・化学肥料低減栽培や有機栽培に取り組んでいる。有機農業については、機械除草の他、紙マルチやアイガモ農法を取り入れている。JAや企業と連携し、ドローンを用いた液肥による追肥や、アイガモロボットによる除草等の実証実験にも取り組んでいる。外食企業や米穀店（ECサイト）、生協等と結びつき、化学農薬・化学肥料低減栽培や有機栽培により生産された米の販路を確保している。

取組主体の概要

所在地：宮城県登米市  
取組主体：JAみやぎ登米南方町水稲部会  
構成員：86名

| 品目 | 面積(ha) | 化学肥料・化学農薬の低減割合     | 認証関係  |      |
|----|--------|--------------------|-------|------|
|    |        |                    | 有機JAS | 特別栽培 |
| 水稲 | 29.7   | 不使用                | ○     | -    |
| 水稲 | 18.7   | 不使用                | -     | ○    |
| 水稲 | 9.0    | 化学肥料不使用・化学農薬5割減    | -     | ○    |
| 水稲 | 98.1   | 化学肥料5割減・化学農薬5割減    | -     | ○    |
| 水稲 | 216.5  | 化学肥料不使用(※)・化学農薬5割減 | -     | -    |

※育苗のみ化学肥料を使用

取組の経緯等

1995年に食糧管理制度が廃止となり、今後の地域農業をどうしたら良いかを考えた際に、農薬を減らす米づくりにシフトしたことが、環境保全型農業の始まりであった。当時、西日本の生協との繋がりをもったことで、有機栽培米を買い支えてもらうことができ、有機農業を進めることができた。

取組内容と成果

生産に関する取組

有機JAS米については、機械除草のほか、アイガモ農法、紙マルチ等の様々な技術を活用し生産を行っている。部会内で栽培講習会を開催することで、部会員の生産技術の研鑽に努めている。また、省力化による作業効率化を図るため、JAや企業と連携し、ドローンを用いた追肥技術やアイガモロボットによる除草技術といった最新技術の実証に積極的に取り組んでいる。

消費に関する取組

有機JAS米については、有機JAS米や特別栽培米を取り扱う米穀店（ECサイト）を中心に販売を行っている。また、特別栽培米については、外食企業と契約栽培を行うことで、安定した販路の確保につなげている。消費者との交流では、販路の一つである西日本の生協が主催する生協組合員との交流会に参加し、商品のPR活動を積極的に行っている。

その他の取組

生き物調査のほか、冬みず田んぼ、水田魚道・ビオトープの設置等を通じて、生物多様性の保全につなげている。また、地域内外の小学校への出前講座を通じて、環境保全型農業についての理解促進につなげている。

今後の展望

有機JAS米、特別栽培米等の環境にやさしい各種栽培方法による生産に加え、複数品種の栽培に取り組むことで、消費者ニーズに応じた生産を行い、販路の拡大を目指す。

## 成功のポイント

### 課題となった点

県内でも、環境保全型農業の取組の先進地として、長年にわたり取組を展開しており、現在に至るまで、様々な課題と向き合いながら取組を継続してきた。その課題の一つとして、販路の確保が挙げられる。農業情勢が変化する中で、一定の販路の確保は難しく、変化に応じた販路確保への対応が求められた。

### 解決に至るプロセス

有機栽培や特別栽培などによって栽培された農産物の販路を確保するため、多くの品種の作付けに取り組み、販売先の需要に応じた生産活動を展開している。また、外食企業、米穀店（ECサイト）、生協等、多様な販売先とつながりを持つことで、安定的な販路確保に努めている。



### 工夫した点

販路の確保に向けた取組のほか、後継者不足、労働力不足等様々な課題を抱えている中で、環境負荷低減や生物多様性保全等の取組の維持に向けて、ドローンによる追肥やアイガモロボットによる除草等、省力化に向けた様々な技術実証にも取り組んでいる。また、消費者との交流や、地域の小学校への出前講座等を通じて、有機農業の取組について積極的な情報発信を継続することで、有機農業の理解促進につなげている。

### アドバイス・メッセージ等

私たちが有機農業を20年以上に渡り、継続できているのは、米作りへの愛と情熱を持っているからです。今後も引き続き、地域社会と与えられた環境を愛し米作りへの情熱を捧げていきます。

### 本取組の問い合わせ先

- ・JAみやぎ登米 南方支店 西部営農経済センター
- ・Tel : 0220-58-2315

平成2年に水稻の農薬・化学肥料低減栽培の取組を5haで開始し、首都圏の生協を中心に構成される現在のパルシステム生協へ米を供給したことが、取組のきっかけであった。その後は、取組について地域の生産者の理解を得ながら生産者・作付面積の拡大を図ってきた。令和3年度現在、構成員は142経営体（法人・個人含む）となり、水稻作付面積380haのうち、350haを農薬・化学肥料低減栽培や有機栽培に取り組んでいる。化学肥料の代わりに完熟堆肥、発酵鶏糞を使用した土づくりの実践、特定の農薬を使用しない栽培基準に従った栽培等の取組により、農薬・化学肥料低減栽培へとつなげている。

取組主体の概要

所在地：宮城県遠田郡美里町字素山町1番地  
取組主体：JA新みやぎ みどりのパルシステム米栽培研究会  
構成員：142経営体

| 品目 | 面積<br>(ha) | 化学肥料・<br>化学農薬の<br>低減割合 | 有機<br>栽培 | 特別<br>栽培 |
|----|------------|------------------------|----------|----------|
| 水稻 | 48         | 不使用                    | ○        |          |
| 水稻 | 302        | 化学肥料5～9割減<br>化学農薬5～7割減 |          | ○        |

取組の経緯等

平成2年に旧小牛田農協（現在のJA新みやぎみどりの地区本部）で、化学農薬や化学肥料に頼らない農産物の生産を目指すべく、化学農薬や化学肥料の使用量を低減した米を栽培する取組を5haから始め、首都圏のパルシステム生協へ特別栽培米の供給を開始したことが取組のきっかけである。その後はJAの合併等を機に生産者・作付面積の拡大を続け、現在に至っている。

取組内容と成果

生産に関する取組

研究会設立当初の平成2年は5haからのスタートであったが、JAの合併を機に各地域の生産者から化学農薬・化学肥料低減栽培の取組に対する理解を得られるよう、徐々に生産者・作付面積の拡大を図った。良質な根を育てるための土づくりに着目し、地域全体の土壌診断を行い、土壌タイプに基づいて肥培管理を統一している。化学肥料の代わりとして完熟堆肥や発酵鶏糞を使用し、化学肥料施用量を削減している。また、特定の化学農薬を使用しない栽培基準に従った栽培をすることで、化学農薬・化学肥料低減栽培へとつなげている。

【定量的な成果】  
取組面積  
5ha (H2) → 350ha (R3)

消費に関する取組

主に首都圏の生協で構成されるパルシステム生協と結びつくことで、有機栽培米、特別栽培米の販路確保につなげている。化学肥料・化学農薬不使用で栽培された米は、供給先におけるプライベートブランド米となっている。

その他の取組

大崎地域の「世界農業遺産」で実施しているモニタリング調査表を利用し、NP0法人田んぼ（大崎市田尻）や大崎市と連携しながら、生産者や生活協同組合職員を対象とした研修や調査、消費者との交流会で生き物観察を実施し、取組についての理解促進につなげている。

今後の展望

多様な生き物が米づくりに関わっていることで、農薬を減らせる栽培にも繋がっていることを、消費者との交流活動を通じて伝えながら、持続可能な農業を展開していく。

## 成功のポイント

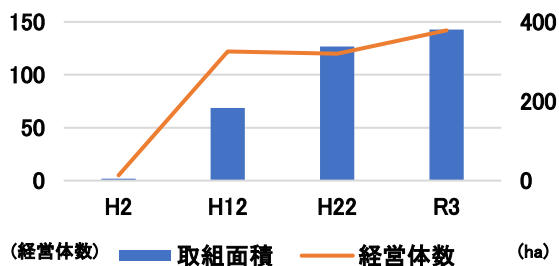
### 課題となった点

平成2年に会員5名、5haで水稲の農薬・化学肥料低減栽培の取組を開始。首都圏の生協で構成されるパルシステム生協へササニシキを供給したことが始まりであった。設立当時、農薬・化学肥料低減栽培された米の需要は高かったものの、生産が需要に追いつかず、供給不足の状態であった。

### 解決に至るプロセス

JAの合併を機に各地域の稲作部会へ農薬・化学肥料低減栽培、有機栽培の取組について呼びかけを行い、理解・共感を得られる生産者を徐々に増やしていった。その結果、パルシステム生協へ供給するための農薬・化学肥料低減栽培米、有機栽培米の作付け拡大に繋がった。平成2年に5経営体・5haだった取組は、令和3年現在は142経営体・380ha（うち慣行栽培30haを含む）の取組へと拡大している。

取組面積及び経営体数の推移



### 工夫した点

生産者・作付面積の拡大に加えて、供給先のパルシステム生協の組合員との交流会を長年継続して実施している。交流会は20年以上継続して行っており、現在でも年4回程度実施している。生産者と消費者の交流を通じて、農薬・化学肥料低減栽培、有機栽培の取組について消費者に理解してもらうことで、産地とのつながりを重視する取引先との関係づくりへとつなげている。



### アドバイス・メッセージ等

パルシステム生協の組合員とは、産地交流会を通じて消費者と生産者が家族的な付き合いをしている。会長は、交流会に来たゆめコープ会員を家族同然のように迎え入れる気持ちで、「おかえりなさい」の挨拶で始まる。このことが、生協組合員にとって生産者と会える楽しみとなり、ファンとなって再度産地に訪れ、産地を第二の故郷とする想いを強くしている。今後もパルシステム米栽培研究会の取組と農産物の価値を伝え、関係機関と連携しながら、持続可能な農業を目指したい。

### 本取組の問い合わせ先

- ・JA新みやぎ みどりのマーケティング室
- ・Tel : 0229-87-3344



有機稲作において、抑草をどのように効率的に行うかは大きなポイントの一つである。田植えした後に水管理のみで、一切人や機械が田んぼに入らず、抑草することができれば、有機稲作が各地で広がる可能性が大いにある。

## 取組主体の概要

- 所在地：栃木県佐野市
- 取組主体：関塚農場
- 取組農家数：1戸

| 品目 | 面積<br>(a) | 化学肥料・<br>化学農薬の<br>低減割合 | 認証関係      |          |     |            |
|----|-----------|------------------------|-----------|----------|-----|------------|
|    |           |                        | 有機<br>JAS | 特別<br>栽培 | GAP | ISO<br>-7- |
| 水稻 | 180       | 不使用                    | ○         |          |     |            |

## 取組の経緯等

栃木県内の有機農家で田植え後一切除草しない稲作を実践されている方がいると聞き、自分も実践してみたくなった。

除草しない稲作が実践できれば、かなり効率的な有機稲作を実践できるので、栽培面積を増やすことができると考えた。

## 取組内容と成果

### 生産に関する取組

代かき3回と田植え後の深水管理で、実際に田植えした後に草が生えてこないか試し、おおむね成功したため、栽培面積(2015年：60a→2021年：180a)を増やすことができた。

### 流通・加工に関する取組

お米の販売に加え、加工にも取り組みたいと考え、玄米粉の生産も2021年から始めた。玄米粉の製粉は製粉所に加工を委託した。この際、お菓子にも使えるような粉であれば販売しやすいだろうと考え、お菓子でも使えるように製粉できる製粉所を探し委託した。

### 消費に関する取組

直接、消費者の方にお米を販売しているため、顧客の獲得が大きな課題の一つだが、SNSやウェブサイトなどのインターネット上のつながりを強化して、顧客を掴んでいる。

### その他の取組

獣害の激しい地域なので、イノシシやシカの害がひどいが、安価で設置しやすい柵を考えて、実践した。ワイヤーメッシュ、異形鉄筋、VP管、ネットを用いて、獣害に対応している。

## 今後の展望

田植え後一切除草しない有機稲作は概ね実現できたが、単収が不安定(4～6俵/10a)な面もあるので、今後は除草機を活用して除草の効率をさらに高め、収量の安定化を図るとともに、雑草以外の減収要因を分析し単収を上げられるようにしたい。

## 成功のポイント

### 課題となった点

#### 【抑草技術】

1回目の代かきから雑草が生え始めたときに2回目の代かきを行うが、雑草が生えるタイミングが分からなかった。

#### 【獣害対策】

2020年にシカの害が増えて、10aくらいのお米を食べられてしまった。稲作をやめてしまおうかと思うくらいの被害だった。



雑草が生えてきた様子

### 解決に至るプロセス

#### 【抑草技術】

代かきを何度も実践することで、雑草の生える時期がわかるようになり、2回目の代かきのタイミングが分かるようになってきた。1回目の代かきからだいたい2週間位、また、2回目の代かきから10日目くらいで草が生えてくることがわかった。

#### 【獣害対策】

シカ害を止めるために防護柵を見直した。地上1mはワイヤーメッシュで、ワイヤーメッシュの上に電気柵の電線4本を設置したが、獣に突破され続けられたため、電気柵をやめることにした。

### 工夫した点

#### 【抑草技術】

3交代かきを行うことにした。1、2回目の代かきで多くの雑草の発生を促すため、1回目の代かきの時期をなるべく早く（4月下旬）して、3回目の代かきで抑草を行った。

#### 【獣害対策】

電気柵をやめて、ワイヤーメッシュ（1m）の上に鉄筋とVP管、ネットで自作した柵を1m張り、高さ2mにした結果、2021年はほぼ防ぐことができた。ただし、突破しようとして支柱が折れてしまうことがあるので、改良も検討するべきである。



### アドバイス・メッセージ等

田植え後一切除草しない方法は、水温が冷たい地域では、代かきの間になかなか雑草が生えてこないのが難しいかもしれないが、できる地域もあると思うので、挑戦してほしい。

### 本取組の問い合わせ先

・ 関塚農場 Tel : 0283-87-0536

野生の朱鷺や田んぼの生きもの等、自然環境に配慮した酒米栽培から酒造りまで一貫した取組を実施。

## 取組主体の概要

- ・所在地：新潟県佐渡市
- ・農業者名：佐々木邦基

| 品目     | 面積<br>(a) | 化学肥料・<br>化学農薬の<br>低減割合 | 認証関係      |          |     |            |
|--------|-----------|------------------------|-----------|----------|-----|------------|
|        |           |                        | 有機<br>JAS | 特別<br>栽培 | GAP | ＩＪＡ<br>-マ- |
| 水稻     | 366       | 化学肥料5割減<br>化学農薬5割減     |           | ○        |     |            |
| うち自然栽培 | 126       | 不使用                    |           | ○        |     |            |
| うち酒米   | 30        | 不使用                    |           | ○        |     |            |

## 取組の経緯等

- ・日本酒造りに興味を持ち、原材料（酒米）作りから自身で取り組むことを目指す。
- ・県内酒造会社で研修を受けた後、地元佐渡市にＵターン就農する。
- ・地元酒造会社への勤務と併せ、化学農薬や化学肥料を使用しない稲作経営を確立する。
- ・佐渡生きもの語り研究所等、環境教育や生物多様性を推進する団体で活動する。

## 取組内容と成果

### 生産に関する取組

佐渡有機農業研究会やＪＡ佐渡自然栽培研究会に所属し、栽培技術の研鑽や多様な農業者との交流を通じて、経営を確立する。化学農薬や化学肥料を使用しない稲作は、田植え後の生育を安定させることが極めて重要なことから、田植え時の根の傷みが少ないポット苗による栽培を行っている。

【定量的な成果】  
(H10年からR3年)  
面積：80a→366a

### 流通・加工に関する取組

米の出荷は、地元のＪＡを中心に行っている。  
酒米は、ＪＡを通じて自身が勤務している地元酒造会社に販売し、自身が栽培した酒米で酒造りを行う。

【定量的な成果】  
(H10年からR3年)  
出荷面積：0a→130a

### 消費に関する取組

農業者６人でグループを作り、自然栽培農法で栽培した酒米を用いたオリジナル銘柄金鶴純米大吟醸「上弦の月」を企画。例年９月に酒販店を通じた販売を行うが、予約分で完売する年もある程の人気商品として定着。

【定量的な成果】  
(H10年からR3年)  
使用量：0kg/年  
→720kg/年

### その他の取組

農業者５人でグループを作り、地元の保育園に有機栽培の野菜やお米を提供している。保育園の献立に応じて必要な量をその都度納品しており、数キロ単位の農産物を月平均10回ほど提供。

## 今後の展望

自然栽培や有機栽培の品目を増やし、地元の学教給食等へ提供していきたい。



## 成功のポイント

### 課題となった点

就農当時は、化学農薬を使用しない栽培技術が確立されていなかったため、雑草の対策が不十分であり、収量が不安定であった。

これまで、米ぬかや屑大豆などの有機物による除草や除草機による除草などに取り組んできたが、クログワイ等、塊茎で繁殖する一部の草で効果が不安定なことから技術として定着させることは出来なかった。

### 解決に至るプロセス

現在は、耕耘方法の工夫や無施肥での栽培、稲の生育と雑草の発生状況に応じた機械除草を3～4回実施することなど、複合的なアプローチにより安定した生育量を確保することが出来ている。

栽培に関する技術や、目指すべき経営等のヒントを得るために積極的に様々な人と交流を図った。

【これまで所属していた団体】

- ・ 4Hクラブサークル「島っ子」
- ・ 民間稲作研究所
- ・ 新潟県農業士会
- ・ 佐渡トキの田んぼを守る会
- ・ 佐渡有機農業研究会
- ・ J A 佐渡自然栽培研究会
- ・ 佐渡生きもの語り研究所 朱鷺と暮らす郷推進協議会

時間をかけながら、自分自身で実践・観察・分析・再検証を繰り返し、栽培技術の確立に取り組んだ。

### 工夫した点

家族と一緒に持続可能な生活の形を追求した。自分の価値観の追求と併せ、経営と生活のベストバランスを見つけることができたため、その結果が今の経営につながっている。

### アドバイス・メッセージ等

自分の価値観を追求して経営と生活のベストバランスを見つけてください。これらの取組を通じて得られた結果が、農業者としての個性であり、経営の特徴にもなります。



写真1 自然栽培の水田



写真2 若手農業者との交流会



写真3 酒蔵での勤務の様子



写真4 オリジナル銘柄  
金鶴 純米大吟醸「上弦の月」

## 本取組の問い合わせ先

・ 新潟県農林水産部農産園芸課（橋立） ・ Tel : 025-280-5296